

人はなぜ「故郷」を必要とするのか —長野県、NPO法人ふるさと回帰支援センターの事例から

吉田知世

「故郷」—この言葉は人に安らぎや温かさを与えてくれる。「故郷」が無いというだけで、なぜ心もとない不安な気持ちになってしまうのだろうか。この問いに答えを求めべく、本論文では近年の団塊世代の地方都市への移住現象を事例とする。本来「出自の地でない場所」を「故郷」と移住者が認識し移住する新たな動きを、それを支援する長野県庁・県内の任意団体・NPOへの聞き取りから考察する。なぜ人は「故郷」を必要とするのか、出自の地であってもそうでなくても「故郷」と思うことができるのであれば「故郷」に求められるものはいったい何なのだろうか。これらを明らかにするという点で本論文は意義があるのである。

県の施策担当者・県内の任意団体事務局の方達(団塊の世代の移住者と移住希望者)・NPO職員の方への半構造化インタビューから以下のことが分析された。①人口減少と超高齢化社会を向かえる現代において、地方自治体の対策の一つとして団塊世代の移住が注目されている。自治体間で移住者獲得の差別化を図るため、事例の長野県では「信州」という言葉を宣伝に使い、それに付与される懐かしさやノスタルジックさと想起される自然風景が、団塊世代に期待され

ている「故郷像」であると考えられている。②移住希望の団塊世代の「故郷」を構築するにあたり必要な要素は、「農的」な「田園」風景であると考えられる。③実際の移住者への聞き取りでは「地元」「都会」「内」「外」「根っからの信州人」という言葉の選択に着目した。これは地域社会に完全に同化しない、「地元」でも「都会」出身者でもない、第三者的な視座で地域社会に貢献しようとする意識を示している。

これらから県の施策やマスメディアの宣伝では、自然風景のような外的要素が重要視される一方、実際の生活ではむしろ地域社会での人間関係など内的要素が「故郷観」の構築に重要であることが明らかになった。

何に心のよりどころを求めると、それが本来与えられていた出自の地であろうと、人生で多くの経験を積んだ後に選び取るものであろうとも、心のよりどころを求めると人の心情が変わりはない。ただ、「故郷」とは与えられているものではなく、自分から自ら選び取るものでもあるのだ。自己の過去の経験が投影された「故郷」を選択することが時代背景のなかで可能であると考えられるのである。

横浜ドリームランド跡地再開発の過程に見る 「よりよい空間づくり」の考察

白 窪 梓

近年、遊園地や学校、企業のグラウンドや寮など低未利用地の土地利用転換が進んでいる。市場の原理に組み込まれた結果、これら跡地は高層マンションやショッピングセンターへと様変わりし、周辺の土地利用との調和や住民の意思の反映がされない再開発が行われている。跡地には、元所有者と新たな所有者、周辺住民、行政、企業など様々な人が関わっており、それぞれが跡地に異なる思いや期待を寄せている。

どのような交渉を行えば跡地は「よりよい空間」へと再開発されるのかを検証した。

本論文では、住民のまちづくり運動を中心にして、多くの人々が納得できる再開発に成功した横浜ドリームランド跡地を研究対象にした。聞き取りによって跡地再開発の過程を明らかにし、それぞれの立場で解釈を行うといった研究方法を取った。

住民は「安全で緑豊かな快適な空間」を求め

て、跡地進出が決定した中古車オークション会社の撤退に成功している。しかしこの再開発は住民の反対運動だけではなく、横浜市の行政として公平な対応や進出企業の跡地や住民への理解があって実現したものであった。そして再開発を成功に導いた活発な住民運動の原動力になったのは、この土地は「自分たちのまち」であるという強い愛着や思い入れであると分析する。もともとは田畑のみだった丘陵地に、広大な面積を誇る横浜ドリームランドができ、自分たちの居住環境を含む「まち」が築かれていった。

ランドによって交通の不便や跡地再開発の不安をもたらされた住民であったが、ランドは自分たちのまちのシンボルであり、アイデンティティの拠り所でもあった。こうしたジレンマを持ちながらも、ランドがつくってくれた「土地への思い」によってランド無き跡地に「よりよい空間」が築かれた。

跡地再開発にはこうした跡地への「思い」を認め、人によってその「思い」が異なることを理解することが重要だ。こうした意識が「よりよい空間づくり」には必要である。

「キャンパス空間の〈まなざし〉と女子大生の身体観」 ～身体のスリム願望を通じて～

渡 辺 昌 子

本研究は、女子大生の持つ“スリム願望”に焦点を当て、キャンパス空間における女子大生の身体に働く〈まなざし〉に迫ることを目的として論じた。本研究は“スリム願望”という人間の価値観の問題を「空間と身体の関係性」から解明する試みである。地理学では、空間をその論理契機として重要な位置におき、“社会集団・社会的組織”などの相対空間と“建築物”など広がりのある絶対空間が複合して“空間”をなすと考えられている。よって筆者は「相対空間」として捉えられる「人間の心理や意識」の問題である“スリム願望”を地理学からアプローチしていきたいと考えた。

これまで「女の身体とはなにか」という問題を積極的に議論してきたのはフェミニズムであった。この中で女性の身体は男性の〈まなざし〉の客体であるとされ、〈見る側としての男性、見られる側の女性〉という二項対立的な捉え方がなされてきた。しかし、本研究における学生を対象とした意識調査から、“スリム願望”は、実体としての男性の〈まなざし〉によるものからのみ生じる衝動ではないことが明らかとなった。学生の身体観

を決定しているのは大学生協の商品やマスメディアの情報といった“学生を取り巻くモノ”の影響で決定しており、これが〈まなざし〉となって身体に働きかけているという論に行き着くことができた。特に女子大生の持つ“スリム願望”にはマスメディアからの影響が強く働いていた。さらに男子大学生の持つ身体観を支えるのもマスメディアからの情報であった。つまり、マスメディアという〈まなざし〉は現代の身体観構築に特異性を与えており、女性の身体だけでなく男性の身体にも働き、ジェンダー化された規範を強化する働きをしていた。女子大生・男子大学生ともその身体的価値観は自然発生的に生まれるものでなく、社会空間の中でジェンダー化された価値観により“社会構築的”に成立するものであった。

現代社会において身体は、旧来からの二項対立的な性差に注目した捉え方だけでは説明しきれないものである。マスメディアをはじめとする社会からの〈まなざし〉が介入することで身体は複雑なものになっている。